Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-23

フレーベルの『母の遊戯と育児歌』の教育的意義とアメリカ,日本での受容の検討 : その2 日本での受容と「遊戯唱歌教材」としての意味

白川, 蓉子

(Citation)
神戸大学発達科学部研究紀要,5(1):61-76

(Issue Date)
1997-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81000269

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000269

KOBE UNIVERSITY

神戸大学発達科学部研究紀要
第5巻第1号　1997

フレーベルの『母の遊戯と育児歌』の教育的意義とアメリカ、日本での受容の検討

――― その2　日本での受容と「遊戯唱歌教材」としての意味 ―――

白　川　蓉　子*

F.Fröbel's "Mutter-Spiel und Koselieder" examined, and its introduction to America and Japan in the late nineteenth century

――― Part 2 The introduction to Japan and discussion on the book―――

Yoko　Shirakawa*

1．日本の幼稚園カリキュラムにおける『母の遊戯と育児歌』の導入

前論文[1]でふれたが、日本とアメリカでは、幼稚園導入の経過と幼稚園運動の展開が対照的な様相を呈している。アメリカでは、エリザベス・ピーボデイが幼稚園運動を組織的に展開し、慈善幼稚園の設立など、ドイツ移民が持ち込んだキンダーガルテンをアメリカ社会に根づかせようとした。1880年代には、セントルイスで、幼稚園を公立学校に組み入れる運動が起こり、公立化がひろがって行った。これに対して、日本では、維新政府が率先して欧米の近代文化を導入する一環として幼稚園を就学前教育施設に採り入れた。フレーベルの死後、十数年を経たその頃、アメリカでは幼稚園運動が展開されていた。維新政府は積極的に行政官や学生を欧米に派遣し、先進国の教育事情を視察および研究させた。なかでも、幼稚園創設に貢献した田中不二麿は岩倉具視の欧米視察使節団に随行し、後に1876年米国建国百年記念博覧会にも出席し、当時のアメリカの幼稚園運動の多様な展開を反映した具体的実態を報告書にまとめている。[2]

（1）フレーベル幼稚園の紹介書にみられる『母の遊戯と育児歌』

文部省刊行の「教育雑誌」にも、幼稚園を紹介した論文はみられるが、フレーベルの幼稚園教育法を体系的に翻訳紹介した最初の書物は、①桑田親五『幼稚園』文部省（明治9年1月，1876）と②関信三『幼稚園記』東京女子師範学校（明治9年7月，1876）である。この二書こそ1876年の幼稚園創設に向けて幼稚園の教育内容・方法の指針となったものである。

①桑田親五『幼稚園』で紹介された『母の遊戯と育児歌』

翻訳書『幼稚園』の原書は次の書である。

Johann and Bertha Ronge, A Practical Guide to the English Kindergarten, (Children's Garden,) for the Use of Mothers, Governesses, and Infant Teachers, London, 1854 (1st edition)

（以後ロンゲの書とする）[3]

ロンゲの書は、フレーベルの幼稚園理論の原書に近い内容をドイツ人のロンゲ夫妻[4]がイギリスの子どもたちのために紹介した指導書である。第七遊具までの遊び方、紙，棒，粘土などの作業具による作業と体操，遊戯と遊戯歌の楽譜が掲載されている。ロンゲの書は、初版の年度も古く、遊具はま

＊ 神戸大学発達科学部児童発達論講座

（1997年4月30日　受付
1997年5月14日　受理）

だ「二十恩物」に系統化されていない。フレーベルの幼稚園の原型に近いものをイギリスの子どもに適用している。遊具，作業具については、別の論文で検討することにして、本論文では、遊戯と遊戯歌のカリキュラム化に焦点をあてて検討する。ロンゲの書の遊戯と遊戯歌を一覧すると、３２編の楽譜つきの遊戯歌には『母の遊戯と育児歌』から採られた思われるものが多く見られる。

桑田の『幼稚園』とロンゲの書を対照してみると次のようであった。まず、桑田の『幼稚園』はロンゲの書の全体の構成や章だてを変えないで翻訳している。そのなかでも、第七遊具までの解説とイラストはほとんど変更がないが、例えば、棒を並べて文字をつくる（第七　遊具）は、アルファベットではなく、片仮名と漢字に置き変えるという、小さな置き換えがある。遊戯と遊戯歌は３２編を省略なく掲載しているが、歌詞と遊戯動作の説明を翻訳し、楽譜は掲載されていない。このことに関して、桑田は「第一　鴿舎ノ歌」のなかで次のような解説をつけている。

「校正者曰ク西洋ノ諸歌ヲ譯シテ我國ノ音調トナシ歌ヒ且舞フハ極テ難シ故ニ今試ニ其歌ノ大意ヲ
我國ノ音調トナシテ以テ示ス余ハ皆直譯ナレバ讀者其ノ意ヲ領セヨ」[5)]

以上をふまえて、表１に、桑田の『幼稚園』で紹介された遊戯歌の、『母の遊戯と育児歌』からの経路を示した。

表１　桑田親五『幼稚園』で紹介された『母の遊戯と育児歌』の遊戯歌

桑田親五『幼稚園』	ロンゲの書	『母の遊戯と育児歌』	<覚書>
手引草の歌	Introductory Song		
第一　鴿舎ノ歌	Ⅲ The Pigeon House	15. はとの家	
第二　睦マシキ家ノ歌	Ⅰ The Happy Home		
第三　楽キ景色ノ歌	Ⅱ The Pleasant Sight		<むすんでひらいて>
第四　穴兎ノ歌	Ⅳ The Hare in the Hollow	28. 小うさぎ	
第五　杜鵑ノ歌	Ⅴ Cuckoo	45. かっこうかっこう	
第六　魚ノ歌	Ⅵ Fishes	10. 小さな魚	
第七　太陽系ノ歌	Ⅷ Solar System		
第八　磨車ノ漏計ヲ打ツ歌	Ⅸ The Clappers		
第九　風車ノ歌	Ⅹ The Windmill		<運動遊戯>
第十　水車ノ歌	ⅩⅠ The Waterwheel		<運動遊戯>
第十一　擺ノ歌	ⅩⅡ The Pendulum	6. チック　タック	
第十二　看風旗ノ歌	ⅩⅢ The Weathercock	3. 塔の風見	
第十三　籃ノ歌	ⅩⅣ The Basket	14. 花かご	
第十四　鳥巣ノ歌	ⅩⅤ The Bird's Nest	13. 鳥の巣	
第十五　蜂ノ歌	ⅩⅥ The Bees		
第十六　農夫ノ歌	ⅩⅦ The Peasant		
第十七　鋸匠ノ歌	ⅩⅧ The Sawyer	33. 大工さん	
第十八　桶匠ノ歌	ⅩⅨ The Cooper		
第十九　孤輪車ノ歌	ⅩⅩ The Wheelbarrow		
第二十　児童祝賀ノ歌	ⅩⅩⅠ The Child's Greeting		<運動遊戯>
第二十一　體操小教師ノ歌	ⅩⅩⅡ The Little Master of Gymnastics		
第二十二　遊球ノ歌	ⅩⅩⅢ The Wandering Ball		<運動遊戯>
第二十三～第三十一　無題	ⅩⅩⅣ～ⅩⅩⅩⅡ　無題		

表１に見られるように、ロンゲの書には、フレーベルの『母の遊戯と育児歌』からかなり多くの遊戯歌が採用されている。『母の遊戯と育児歌』以外の出典としては、フレーベルの『幼稚園教育学』でフレーベル自身が著している「運動遊戯」(Bewegungsspiel)[6]からと思われるものがある。X The Windmill, XI The Waterwheel などがこれにあたる。桑田の『幼稚園』にも『母の遊戯と育児歌』からの遊戯歌が紹介されたわけだが、桑田は「音調」は訳せないが遊戯と歌詞を直訳しているので、幼稚園ではこれをもとに、遊戯を実践してほしい、としている。

②関信三『幼稚園記』で紹介された『母の遊戯と育児歌』

関信三『幼稚園記』は, Adolf Douai, The Kindergarten. A Manual for the Introduction of Froebel's System of Primary Education into Public Schools; and for the use of Mothers and Private Teachers, E. Steiger, New York, 1872 の翻訳である。以下、原書をドゥアイの書とする。

ドゥアイの書は、フレーベルの幼稚園教育法を公立の初等学校や家庭教育に適用すべく紹介した指導書である。ドゥアイ自身が、本書はフレーベルの教育法の基本をドイツ語と英語の２カ国語で紹介して初等学校教師用の指導書とし、さらに、ドイツで実践されている遊戯歌，童詩，お話を多数掲載したのが特徴であり、幼稚園の遊具・作業具・遊戯等についてはすでに出版されているE. P. Peabody & Mrs. Horace Mann, Kindergarten[6]とEd. Wiebe, Paradise of Childhood[7] を併せてテキストとすべきと、述べている。[8] 遊具については、すでに、「二十恩物」(The Twentieth Gift)という言葉が使われている。[9] 結局ドゥアイの書のおよそ４分の３は、遊戯歌，童詩，お話で占められている。このうち２４曲の遊戯歌と２３曲の唱歌[10]にはすべて楽譜がついていて、その何曲かは、後の幼稚園唱歌集と小学唱歌集に採用されている。（ 白川・五味・岩本, 1996 ）[11]

表２　ドゥアイの書と関信三『幼稚園記』にみられる『母の遊戯と育児歌』

ドゥアイの書, Pieces of child-like poetry with appropriate tunes	関信三『幼稚園記』（楽譜なし）	ドゥアイの書	関信三『幼稚園記』	覚書
A-Kindergarten Games	初段遊戯課	B-Mental Exercises	後段心性課	
1. Cradling	其一篇 動揺（巻一）	I. Child-like Songs		
2. Baking		1. Summer	其一篇 夏（巻一）	曲 霞か雲か
3. Climbing	其二篇 攀木（巻一）	2. Birds	其二篇 鳥（巻一）	
4. Nestling		3. May	其五篇 五月（巻一）	
5. Pendulum	其三篇 擺子（巻一）	4. Winter's End	其三篇 初夏（巻一）	
6. Carpentering		5. In Winter	其四篇 冬（巻一）	
7. Organ-grinding		6. Winter	其六篇 冬（巻一）	
8. Sailing		7. Snow-balling	其七篇 雪（巻一）	曲 蝶々
9. Imitating		8. Christmas	其八篇 誕日（巻一）	曲 讃美歌
10. Guessing	其四篇 盲想（巻一）	9. The Urchin on the Ice	其九篇 氷上ノ小童（巻一）	
11. Guessing the Singer				
12. Hopping		10. Fall and Flowers	第十篇 秋又花（巻一	
13. Frog		11. ～23.（略）	第十一～第二十三（省略）	
14. Cat and Mouse	其五篇 猫鼠（巻一）☆			
15. The Dove-Cote	鳩巣（附録・戯劇）			
16. Coopering	手車（附録・戯劇）			
17. The Mill	風車（附録・戯劇）☆			
18. The Farmer	其六篇 農夫（巻一）			
19. Snail	其七篇 蝸牛（巻一）☆			
20. Coil				
(GYMNASTIC EXERCISE)				
21. Marching	其八篇 行進（巻一）☆			
22. Another March				
23. Another March				
24. Birds				

＊＿＿＿＿は『母の遊戯と育児歌』にみられるもの。　☆はフレーベルが著述している「運動遊戯」にあるもの。

関信三『幼稚園記』は第一巻，第二巻，第三巻と附録からなる。第一巻にフレーベル教育法の基本と遊戯歌（Pieces of child-like poetry with appropriate tunes）が収められており、第二巻に、曲のつかない詩とお話が掲載され、第三巻にフレーベル教育法による図画教育法が翻訳されている。遊戯歌と唱歌は、翻訳に際して楽譜が省かれ、歌詞の意味づけと遊戯方法のみを訳している。表２にドゥアイの書と関信三『幼稚園記』を対照し、『母の遊戯と育児歌』からと思われる遊戯歌を下線を引いて示した。

表２に見るように、ドゥアイの書でドゥアイが取り上げている遊戯歌や唱歌は、フレーベルの『母の遊戯と育児歌』から採用したと思われるものは、非常に少ない。はっきりしているのは、15. The Dove-Cote, 5. Pendulum, のみである。さらに、フレーベルの「運動遊戯」から採ったものは、19. Snail, 20. Coil, 21. Marching, 22. Another March などである。その翻訳本である関信三『幼稚園記』でも『母の遊戯と育児歌』からの遊戯歌の紹介は「動揺」「擺子」「鳩巣」だけということになる。「風車」は、17. The Mill の訳であり、ロンゲのX The Windmill と同じである。この「風車」は運動遊戯のなかで編成されたものである。『母の遊戯と育児歌』の中の「13. はとの家」は「鳩巣」という運動遊戯になっている。

（２）明治20年代までの『母の遊戯と育児歌』の導入

１）『母の遊戯と育児歌』と「保育唱歌」

以上見たように桑田親五『幼稚園』，関信三『幼稚園記』の二書には、『母の遊戯と育児歌』のなかのいくつかの遊戯歌が、運動遊戯と一緒に紹介されていた。いずれも楽譜は省かれて、遊戯の内容と歌詞のみが翻訳されている。要約するとフレーベルの『母の遊戯と育児歌』は一冊の「遊戯絵本」として日本に入ってくる以前に、遊戯ごとにアメリカやイギリスで遊戯歌や運動遊戯として実践されていて、その実践を指導した指導書が翻訳されるというかたちで、日本にも個々に導入されたといえる。「はとの巣」を例にとれば、『母の遊戯と育児歌』の「はとの巣」⇨⇨運動遊戯「はとの家」⇨⇨『幼稚園』『幼稚園記』に翻訳　という経路をたどったのである。

関信三『幼稚園創立法』（明治11年，1878 ）に、幼稚園を創設するにあたって必要でかつ手に入りやすい洋書の一覧をあげている。それらはボストンにできたばかりの幼稚園専門出版社シュタイガー社のもので、全部で27冊を数えることができる。[12] しかし、そのなかに『母の遊戯と育児歌』の指導書らしきもの、また、その英訳本らしきものは見られない。

ところで、「はとの巣」と「風車」は、『幼稚園』『幼稚園記』の二書において遊戯が紹介されている。この二つの遊戯は幼稚園創設当初から遊戯教材として採り上げられた。ここで、二書とも楽譜は掲載されておらず、桑田の注にあるように、幼稚園関係者は西洋の音調ではなく日本の音調で遊戯することを考えた。こうして、幼稚園の遊戯にとって絶対欠かすことのできない音楽を作る必要が興った。明治１０年１１月１３日、東京女子師範学校摂理中村正直は、宮内省式部寮雅楽課に幼稚園児が歌う遊戯歌と唱歌の撰譜を依頼した。１１月２７日に行われる幼稚園開業式に向けて音楽をつけて演奏することが緊急に必要であった。雅楽課から幼稚園に最初に送付されたのは遊戯歌「風車」と唱歌「冬燕居」の墨譜であった。同年１２月には「百鳥」「秋の日影」「寒夜」「家鳩」「遊魚」「兎」（＿＿は遊戯歌）ができ、明治１５年末には、遊戯歌、「五声」「七声」「高等」に分けられた唱歌を合わせて百曲の保育唱歌ができていた。保育唱歌の遊戯歌とはっきり断定できるものは、「風車」「園之遊」「花見之駒」「兎ｳｻｷﾞ」「手車」「盲想ﾒｼﾋﾉｱｿﾋﾞ」「家鳩」「宇治川」「遊魚ｳﾛｸｽﾞ」「窮鼠ｺﾈｽﾞﾐ」「野山之遊」「山家」である。[13]

『母の遊戯と育児歌』の導入と「保育唱歌」の関連を調べるために、保育唱歌の遊戯歌の出典を辿ってみると、次のようになる。

①『母の遊戯と育児歌』にあって『幼稚園』『幼稚園記』の二書に掲載されているもの――「家鳩」
②『母の遊戯と育児歌』にあって、『幼稚園』に掲載されているもの――「兎ｳｻｷﾞ」「遊魚ｳﾛｸｽﾞ」
③フレーベルの運動遊戯で『幼稚園記』に掲載されているもの――「窮鼠ｺﾈｽﾞﾐ」「手車」「風車」

以上のように、『母の遊戯と育児歌』から採られて、「保育唱歌」の曲をつけられたものは、「家鳩」「兎」「遊魚」ということになる。

2）「風車」・「はとの家」考

「風車」考

『母の遊戯と育児歌』の「3．塔の風見」の挿絵と詩を図1に示す。この遊戯では風に回るものに合わせて「手の関節と肘の運動を練習する遊び」[14] となっている。挿絵の中には、風になびく旗やハンカチ，塔の上の風見鶏，凧，子どもが回している風車が描かれている。挿絵の後の説明文には次のような叙述がなされている。

「『カラカラカラ』と聞こえてくるのはなんでしょう。風が風車の翼を激しく追い回すので、翼がふるえてせっかちなカラカラという音をたてているのです。――（略）――ああもうここにひとりの男の子が紙でつくった風車をもってやってきました。その子が早く走れば走るほど風車は勢いよく回ります。」[15]

図1　塔の風見（Das Thurmhähnchen）（茅野蕭々訳『フレョェベル母の歌と愛撫の歌』より）



フレーベルの運動遊戯の実践は、子どもたちが自発的に創り出したものに、詩やメロディーをつけたものが多い。例えば、幼稚園の遊戯室の中央にあるそう太くない一本の柱に子どもたちが片手をかけてぐるぐる回って楽しんでいるのを見て、「水車遊び」という運動遊戯が生まれている。[16] 柱を中心に子どもたちが放射状に手をつなぎ、全体が水車の車輪となって回る遊戯である。「風車」の遊戯はこの「水車(Die Muhle)」の水車の車輪を風車の羽根に置き換えて遊ぶ遊戯として幼稚園の実践のなかから生まれた。フレーベルは、運動遊戯についての著作のなかで、フランクフルト・アン・マインの幼稚園で遊ばれていたこの遊びを紹介している。[17] さらに興味深いことに、後章でのべる英訳本では、「塔の風見」は The Weather-vane と訳されている。このように、『母の遊戯と育児歌』という遊戯絵本の精神やイメージを取り込んで、具体的な遊戯が創作され、実践され、欧米や日本に拡がったものと考えられる。

日本では、「風車」に雅楽の曲がつけられた。数多く作曲された「保育唱歌」の中でこの「風車」のメロディーは最も単純で親しみ易く筆者には思われた。そのせいかどうかは明らかではないが、「風車」だけが、保育唱歌の遊戯歌のなかから「幼稚園唱歌集（明治20年）」に採用され、明治末期まで教材に使われ、歌われていた。[18]

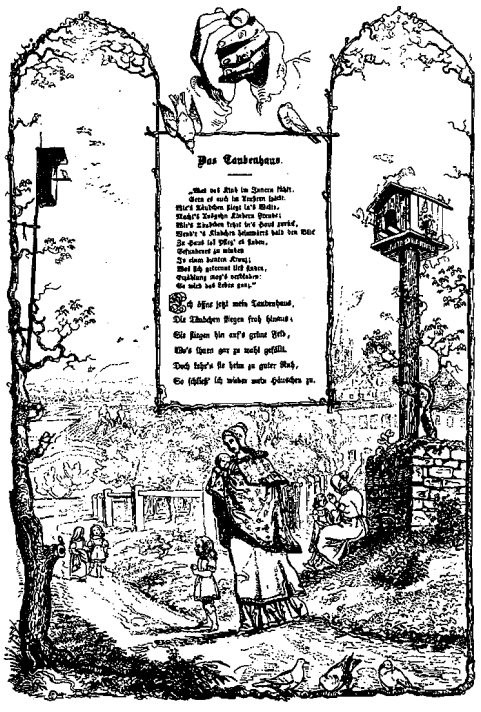
注[19]に「風車」の墨譜と五線譜に直したものを示した。

「はとの家」考

『母の遊戯と育児歌』の「15. はとの家」は、図2の挿絵に左のような詩がついている。[20]

はとのお家を開けましょう
はとは喜び飛んでゆく
緑の野原へ飛んでゆく
はとはとても楽しそう
けれどもはとは帰ってくる
ゆっくりお休みするために
そしたらお家もしめましょう

図2「はとの家」（フリョエベル『母の歌と愛撫の歌』



上の詩を見ると、そのまま遊戯動作を思い浮かべることができる。「はとの家」の遊戯は1850年8 月4 日、フレーベルがアルテンシュタインで開催した遊戯祭で公開されている。[21] 遊戯祭に集まった人々の前で、はと役の子どもが、輪の外に飛び出して、自由に飛び回ったようである。

ロンゲの書の15. The Dove-Cote には、ここだけ唯一「はとの家」の遊戯の挿絵がのっており、桑田親五の訳本『幼稚園』には、挿絵をそっくり模写して掲載している。（図3） 桑田の『幼稚園』によると遊戯の内容は次のようである。四分の三の子どもが輪になって鳩小屋を形づくる。残りの子どもは輪の中で鳩になる。最初の句では、はと小屋の子どもたちは腕をのばし大きい輪を作っている。「鴿舎あけて鴿（ハ－ト）を放そう」の歌詞で、鳩になった子どもたちは両腕をひろげ、輪の外に飛び

図３　「はとの家」の遊戯の挿絵（左はロンゲの書、右は桑田『幼稚園』より）



出して行く。遊戯室から庭にまで出て自由に飛び回る。やがて「早く歸れと鳩舎閉めよ」の歌詞で素早くはと小屋の輪に飛び込む。この句が何度かくりかえされた後、「歸らぬから閉めよソラ閉マッタ」の句で輪を次第に縮めてゆく。[22] この遊戯内容は、世界のどこにでも見られそうな「わらべうた」である。『母の遊戯と育児歌』の詩が遊戯にマッチしていて、今となっては厳密に、遊戯が先だったのか、『母の遊戯と育児歌』の詩が先だったのかは確かめることができない。しかし、『母の遊戯と育児歌』という遊戯絵本が出て、ドイツ各地での幼稚園の遊戯実践を重ねるなかで、次第に上のような遊戯内容に完成されていったのであろうことははっきりしている。

「はとの家」の遊戯につけられた歌の曲は、アメリカで歌われていた楽譜と、日本の保育唱歌の遊戯歌としての墨譜を五線譜に書き改めたもので比較対照することができる。[23] 東儀季芳撰譜の「家鳩」は、「風車」と比較して、難しく冗長で、幼児の遊戯歌としてふさわしくないように筆者には感じられる。[24] また「家鳩」は「風車」のように、幼稚園唱歌集に採用されることもなく、幼稚園の遊戯教材としては、明治20年頃までであった。

２．Ａ．Ｌ．ハウによる『母の遊戯と育児歌』の翻訳導入

（１）Ａ．Ｌ．ハウの頌栄保母伝習所と『母の遊戯と育児歌』

幼稚園設立に積極的であった文部省であるが、その後の幼稚園教師養成は東京女子師範学校においても充実していなかった。独立して専門的に幼稚園教師を養成する機関としての最初のものは民間のキリスト教関係者による頌栄保母伝習所（現在の頌栄保育短期大学）であった。頌栄保母伝習所創設は、神戸基督教会（現在の日本基督教団神戸教会）のキリスト教主義幼稚園設立の動きと相まって出発した。明治19年頃のことである。神戸基督教会婦人会による困難な資金集めの後、幼稚園と保母伝

習所は1889年（明治22年）設立の運びとなった。幼稚園と保母伝習所の創設にあたって神戸基督教会婦人会は、シカゴで私立幼稚園長をしていたＡ．Ｌ．ハウ（Annie Lion Howe 1852 -1940）を招へいすることに成功した。Ａ．Ｌ．ハウはシカゴの北西部のワシントン・ハイツでユニオン教会に属する信仰のあつい開拓者の両親のもとで育った。父親は農業のかたわら教会の役員と日曜学校校長をつとめ、母親も日曜学校の教師をするなど、教育的環境にも恵まれていた。信仰と不屈の開拓精神を受け継いだハウは、35歳で来日し、75歳で帰米するまで40年間にわたって頌栄幼稚園と保母伝習所を指導しただけでなく、日本の幼稚園教育の発展にも大きく貢献した。[25]

頌栄保母伝習所は最初は２年の課程であったが、1893年（明治26年）ハウは２年の普通科課程にさらに２年の高等科課程を置いて養成期間を延長した。しかし、幼稚園教師の高度な専門性についての社会的理解はまだ薄く、応募者が少なかったため1921年（大正10年）までに、僅か４名の高等科卒業者を出しただけであった。明治26年7 月の頌栄保母伝習所のカリキュラムを見ると、「保育学」の「理論」領域で、普通科一二年と高等科一二年に通して週２時間が配当されている。その高等科二年で用いるテキストに、フレーベル著『人之教育』，フレーベル著『母の歌』（『母の遊戯と育児歌』の略であろう）マツレ著『家庭教育』があがっている。高野勝夫(1973)[26]は、この頌栄保母伝習所のカリキュラムをほぼ同年代の東京女子師範学校保母練習科の養成カリキュラムと比較対照した表を作成している。この表によると修業年限が頌栄の２年と東京女子師範の１年という大きな違いの他に、ハウのカリキュラムでは「音楽」と「唱歌」の時間数が数倍も多いことがわかる。

幼稚園の「唱歌」のテキストとしては、すでに文部省音楽取調掛編『小学唱歌集　初編』（明治14年刊）と文部省音楽取調掛編『幼稚園唱歌集』（明治20年刊）が出ていた。しかしハウは洋楽の文化圏の出身であることと、もともと音楽の素養があったため、明らかにこの「和洋折衷」の唱歌教材を使う気にならなかったと思われる。高野は次のようにのべている。

「音楽にたいして深い教養とすぐれた観賞力をもったハウ女史の耳には、それ（音楽的に幼稚で単純な唱歌教材――筆者補注）は耐えられないものであった。それで、女史はまずアメリカの幼稚園で自分が使っていた幼稚園唱歌のなかから適当なものを選び、当時、作詞者として有名な大和田建樹氏や、また松山高吉氏に翻訳を依頼した。」[27]

こうしてハウが独自に編集した「唱歌」のテキスト、『幼稚園唱歌』（明治25年4 月）と『幼稚園唱歌續編』（明治29年4 月）が出版された。

（２）ｴｰ･ｴﾙ･ﾊｳ編『幼稚園唱歌』とｴｰ･ｴﾙ･ﾊｳ編『幼稚園唱歌續編』のなかの『母の遊戯と育児歌』

『幼稚園唱歌』はハウがアメリカの唱歌テキストから選曲し、大和田建樹と松山高吉が歌詞を翻訳して編集した。目次の順番にそってどのような唱歌がとりあげられていたのかを見ることにする。○祈祷歌―１２曲，○朝の歌―４曲，○クリスマスの歌―４曲，○四季の歌―１４曲，○花の歌―４曲，○雑歌―１６曲，○指遊の歌―７曲，○恩物歌―１２曲，○進行歌―３曲，○輪遊歌―１２曲，○五官の歌―２曲，○職業の歌―４曲，以上９４曲であった。ハウは本書の「例言」で「此書輯むる所の唱歌は編者が幼稚園保姆として九年の間實地に試用し其善良なるものを認めたるものなり」と述べており、アメリカで用いていた唱歌の本から選曲したことを示唆しているが、もとの本がどれであるのかは、現在のところわかっていない。楽譜はすべてピアノの伴奏譜がついており、歌詞のいくつかには、遊戯動作を示す挿絵が行中に挿入されている。

ところで、この『幼稚園唱歌』と『母の遊戯と育児歌』の関係はいかなるものだったのだろうか。本書の「例言」では『母の遊戯と育児歌』については一言も言及されておらず、「フレーベル」の名が一回引用されているのみである。９４曲の分類については、高野勝夫(1973,1976）が大まかに行っている。それによると、『幼稚園唱歌続編』の５６曲を合わせて全部で１５０ある唱歌で「そのうち

讃美用が二十五ぐらい、遊戯唱歌用が百あまり、『母の遊戯及育児歌』に属するもの二十ほどあった」[28]とされている。『母の遊戯と育児歌』から採られたと思われるものは、『幼稚園唱歌』の方にいくつか見られ、『続編』には僅かしかない。

『母の遊戯と育児歌』からと思われる唱歌の○雑歌「四十鳩舎（英文目次ではThe Dove Cote)」[29]を検討してみよう。歌詞は「一　はとごやをあけて　白鳩はをるかみよ　かれらは老たるかしのきにとまるを好む　クウクウ老木にとまるを　このむ」となっており、曲の楽譜を見ると、ロンゲの書，ドゥアイの書およびその他の指導書に共通に掲載されていて、コールによる曲だと思われる曲と全く異なる曲譜となっている。次に同じく○雑歌の「四十八　子供と月」は『母の遊戯と育児歌』に全く同じ題名が出てくる。しかし、『母の遊戯と育児歌』では、この詩にコールによる音楽はついていない。したがって、この唱歌は『母の遊戯と育児歌』からきたものではなく、出典は不明である。○指遊びの歌の「六十　指のピアノ」も『母の遊戯と育児歌』に全く同じ題名が出てくるが、照合してみると、歌詞も楽譜も全く異なるものである。○職業の歌の「九十一　風車」は『母の遊戯と育児歌』に起源があって、運動遊戯でよく遊ばれた「風車 Weather-vane 」と同名である。歌詞を見ると、「一　かざぐるま風のまにまにめぐるなり　夜もひもいそしみ米つきむぎつく　木がらしふけばくるまはとくまはる　あるじのよろこびはみちあふれたり」というもので、楽譜はロンゲの書の The Weathercock とは異なる新しい曲であった。[30]

以上のようにひとつひとつの唱歌について検討すると、『母の遊戯と育児歌』のオリジナルな遊戯唱歌をそのまま採用したものはほとんどないといってよい。唱歌の題名は同じであるが、歌詞もメロディーも遊戯動作も異なっているのである。結論を急げば、『母の遊戯と育児歌』はアメリカでも、「遊戯絵本」として全体が翻訳されたのは原著から３０余年を経た後であり、一方、個々の遊戯唱歌はアメリカの子どもにあった曲や歌詞をつけて、さらに多くの遊戯唱歌と一緒に実践されていたのであろう。ハウはそれらの多くの唱歌集から良く歌われた唱歌を選曲して『幼稚園唱歌』『幼稚園唱歌續編』を編集したのである。高野（1976)[31]は、文部省の『幼稚園唱歌集』『小学唱歌集』とハウの『幼稚園唱歌』『幼稚園唱歌續編』を比較しているが、高野の指摘するとおり、ハウの唱歌教材の方がはるかに、豊富で音楽的に水準が高かったといえる。それは、ハウが基にしたアメリカの幼稚園唱歌教材の方が、アメリカの幼稚園運動と幼稚園改革をとうして、一歩進んだ幼児音楽教材となっていたからである。

（3）A．L．ハウの『母の遊戯及育児歌』

１８９７年（明治30年）９月、ハウは『母の遊戯と育児歌』の英語からの翻訳本『母の遊戯及育児歌』を出版した。明治３０年頃には、幼稚園は普及期を終え、保姆養成機関も頌栄以外にもいくつかできてきたが、フレーベルの思想と実践を研究し、正しく普及させることにおいては、頌栄のハウの活動より進んだものは見られなかった。フレーベルの幼児教育思想と実践の中核に位置するこの書は、ハウによって日本で初めて翻訳されることとなったのである。

ハウは第三版の序で「この『母の遊戯』を日本に於いて使用し得られる様に、適當に飜譯出版するに就ては、實に多大の時間・勞力・金錢を要したのであります。」[32]と述べている。翻訳・絵画・印刷などのすべてを坂田幸三郎の監督のもとに行い、翻訳は大和田・柏木・露無の三氏が従事し、絵画の翻案には濱・鈴木の両氏が行ったとハウは述べている。

『母の遊戯及育児歌』は、1897年（明治30年）に初版、1907年（明治40年）に再版、1916年（大正5 年）に第三版、1929年（昭和4 年）に第四版を重ね、昭和9 年茅野蕭々の翻訳が出るまでは、日本で唯一の翻訳紹介本として保育界に貢献した。

ところでハウの『母の遊戯及育児歌』の原書はどの英訳書であったのだろうか。

頌栄短期大学の図書館には、ハウの残した貴重な書籍や資料が豊富であるが、その中に『母の遊戯及育児歌』の原書であると思われる次の英文の本がある。

③ Mother-play, and nursery songs: with notes to mothers/ by Friedrich Froebel; illustrated by fifty engravings. Boston: Lee and Shepard; New York; Charles T. Dillingham, 1888

この本はプリューファー版と同じ大きさの大判で、ハード・カバーの本である。この本の他に、同じ翻訳で、表紙がハード・カバーではなく、BostonのLee and Shepard 社から出た1893年（明治26年）版のコピー版もある。目次や挿絵を照合して、明らかに、この英訳書が、ハウの『母の遊戯及育児歌』の原書であることがわかる。ところで、ハード・カバーの本の奥付けを見ると1878年版権所有とあるので、初版はこの年である。前論文中の②-a）のFrances and Emily Lord による英訳[33]は、初版が1885年でロンドンで出版された後にシカゴでも出版された。従って、アメリカで最初に翻訳出版されたのは、ロードの書ではなく、上述の書ということになり、白川(1997)の論文はこの点を訂正しなければならない。本書はアメリカ版序文をE. ピーボディーが書いており、その中で、唱歌の歌詞はFanny E. Dwight が曲に合うようにドイツ語から英語に訳し、散文はJosephine Jarvis が翻訳したと記しているので、ここでは本書をジャーヴィスの英訳本と呼ぶことにする。

ジャーヴィスの英訳本の1893年版にWichard Lange [34]が「ドイツ語版第二版への序文」を書いていることから、本書のドイツ語の原書はランゲ編のものであることがわかる。ジャーヴィスの英訳本は、フレーベルの『母の遊戯と育児歌』の(1) 挿絵と絵の中の詩の英訳を第一頁に、(2) 挿絵についての短い標語（モットー）と詩歌の英訳を次の頁に、(3) 歌の楽譜を次の頁にというように、遊戯歌ごとに並べている。全部で４９曲の遊戯歌と「終わりの歌」からなっている。プリューファー編と照合すると、歌の順番が変わっていたり、プリューファー編にない曲がついていたりして、底本が異なっていることがわかる。さらに後半は「挿絵の説明—To Mothers; Explanation of the plates 」となっている。歌の楽譜は、ロードの書の楽譜の部とほぼ同じであるので、ローベルト・コールの曲であると考えられる。大判のこの英訳書は、幼稚園ですぐに使える「絵本唱歌集」と母親向けに絵本の挿絵の説明を著したものの二つの目的を兼ね備えた実用書の感がある。

ハウの『母の遊戯及育児歌』は上巻と下巻に別れている。上巻はジャーヴィスの英訳本の前半部分にあたり、遊戯歌の挿絵と詩歌が掲載されている。下巻はそれぞれの挿絵の説明文になっている。このように、ハウの書は、ジャーヴィスの書にそって加除修正もなく翻訳しているのであるが、二書の間には、翻訳よりは、翻案と言った方がよいほどの根本的な相違が見られる。第一は、ハウはジャーヴィスの書の楽譜を省いて、「遊戯唱歌絵本」ではなく、「遊戯絵本」にまとめていることである。縦書きの和綴じ本に五線譜が収まりにくかったことも考えられるが、ハウの音楽的素養からして、コールの曲が子ども向けの曲としても芸術的にも不足を感じたのかもしれない。ハウは「第三版の序」で「フレーベルがこの書をかいた主なる目的は、児童研究用の教科書として、之を使用すると云ふのでありました。（ 略 ）フレーベルは唱歌と楽譜との上には、成功して居ません。それでこの書は児童用としてはあまり使用せられて居ませんでしたが、ブロー嬢が、歌の言葉と楽譜とを改訂して、新しい形で出版してから、児童用としても、一般に使用される様になりました。」[35]と述べている。ハウが翻訳に取り組んでいる頃は、ブロウの仕事を知らなかったわけだが、ハウもブロウと同じく、唱歌と楽譜は新しく改編すべきと思っていたのであろう。以前に出版した『幼稚園唱歌』と『幼稚園唱歌續編』には、『母の遊戯と育児歌』の遊戯唱歌と同じ題名のものもあるが、全く楽譜は異なっていたのはこのことから理解できる。

第二に、「遊戯絵本」としても、挿絵を日本の風土と生活に合うように翻案してしまった。このため、二書は、一見、全く異なる絵本のように見える。しかしながら、こうすることによって、ハウは

フレーベルの「親子遊び」や「わらべうた」や「仕事の模倣のうた」などの深い意味づけを普遍的なものとしてとらえ、生活・風俗の違う異文化のうえに、再表現する努力をし、それが一定程度、成功しているのである。とはいえ、風景の挿絵を翻案することは、それほど容易なことではない。自然や人体に関しては、洋の東西を問わず普遍的であるが、風俗や生活様式を表す挿絵となると相違が著しい。例えば『母の遊戯と育児歌』の「12. お菓子づくり」はドイツ語の原本では、Patsche-Kuchenというもので、西洋の焼菓子を竈で焼く絵であるが、ハウの本の挿絵は「菓子揉（くわしもみ）」と題して、あんこの和菓子やちまきを竈で蒸かす絵となっている。「23. 塔の上の子どもたち」(Die Kinder auf dem Thurme) は、ドイツの絵では教会の高い塔と子どもたちが描かれているのに対して、ハウの本の挿絵は教会にも寺にも見えないあいまいな建物と田園風景のなかの子どもたちと大人たちが描かれており、「塔上の子供」と題されている。「20. 指ピアノ」はドイツ語の原本ではDas Fingerklavier と題して挿絵がない頁となっている。ハウの本には挿絵が描かれており、題名は「指ピヤノ」で、室内で琴を弾く女性と庭で笛と手風琴を奏でる女児が描かれている。[36]

図4



図４はフレーベルの原本では「3.塔の風見」(Das Thurmhähnchen)(図1 参照) でジャーヴィスの英訳本ではThe Weather-Vaneと訳されている。ハウの本での題名は「風車又は風見の烏」となっていて、ドイツの田園風景と屋根の上の風見鶏が、日本の農村風景と農家の屋根の上の「烏のかざり」に翻案されている。このように、子どもの生活や風俗が描かれているものを、異文化の生活や風俗に合わせて改編することの難しさもあるが、さらに、そうすることの意義が検討されなければならない。

３．ハウの翻訳とブロウの翻訳の比較

ハウが『母の遊戯及育児歌』の初版を出した1897年の２年前に、アメリカではスーザン・ブロウがフレーベルの『母の遊戯と育児歌』のドイツ語版をアメリカの子どもたちに適用すべく非常な苦労を重ねて英語の翻訳本を出した。ハウは1916年になって、「第三版の序」で次のように述べている。「不思議なことには、この書は日本と米國に於て、同時に二種の飜譯が試みられました。即ちブロー嬢は米國に於てこの書の英譯に従事してゐられたのに、私はその事實を少しも知らないで、日本に於てこの書の日本譯に着手したのであります。」[37]

ブロウの翻訳については、前論文でとりあげたが、ここで改めてハウの翻訳との比較のもとで内容に踏み込んで検討してみよう。ブロウは1895年にニューヨークのある出版社のINTERNATIONAL EDUCATION SERIES として２冊の『母の遊戯と育児歌』の翻訳本を出版した。それらを前論文から引用すると次のものである。

②-b) The Songs and Music of Friedrich Froebel's Mother Play, Songs newly translated and furnished with new music prepared and arranged by Susan E. Blow. D. Appleton and Company, New York, 1895 (以下The Songs and Music と略して言う)

②-b') The Mottoes and Commentaries of Friedrich Froebel's Mother Play. Mother communings and mottoes rendered into English verse by Henrietta R. Eliot. Prose commentaries translated and accompanied with an introduction treating of the philosophy of Froebel, by Susan E. Blow. D. Appleton and Company, New York, 1895(以下The Mottoes and Commentariesと略して言う)

The Mottoes and Commentariesのなかでは「編集者の序」で、W. T. Harrisが、「翻訳者の序」でブロウが、それぞれに翻訳書の構成について述べている。それによると、モットーの前半の散文部分はブロウが翻訳し、後半の詩の形式は、フレーベルの精神や絵の意味や後ろの注釈にもられた内容を損ねないように、Henrietta R. Eriot が詩に翻案し、後ろの注釈説明文はブロウが翻訳したようである。The Mottoes and Commentaries は、母親や教師向けの幼児理解のための書である。ハリスもブロウも、フレーベルが教育者としての直観は優れているが、詩人としてのセンスは全くないとして[38]、翻訳書の編集にあたって、アメリカの多くの詩人たちに協力を依頼している。The Songs and Music は別の分冊で、まさに子ども向けの「遊戯唱歌絵本」として編集した。本書の目次を見ると、Emily Huntington Miller, Laura E. Richards 他、全部で８名の当時の詩人たちが、挿絵に新しい詩をつけている。ドイツ語の詩と対照すると、ほとんど異なる詩になっている。音楽は全部で８３曲にもなり、Eleanor Smith, Carl Reinecke他、多数の作曲者によって作曲されたもの，ローベルト・コール曲のもの，ヨーロッパの民謡などからなっている。挿絵は、ランゲ編から写し、子どもの表現に若干の修正を加えたものもあり、さらに、The Songs and Music では、子どもの注意を引くために、全体の挿絵の区切られた部分を拡大して次の頁にのせたとしている。[39]

翻訳本のサイズについては、出版社が、楽譜版の厄介な(cumbersome)な装丁から、便利なサイズに変えたとしている。その結果、現在のＢ５判の半分ぐらいの小さな本となっている。

以上見てくると、ハウの翻訳とブロウの翻訳には、共通点と異なる点が見られる。ハウもブロウも

幼稚園教育および教員養成の実践家であり、フレーベル幼稚園の継承者であった。ハウもブロウもフレーベル幼稚園の真髄である『母の遊戯と育児歌』に着目し、日本とアメリカという、ドイツとは異なる文化の基盤に、フレーベルの精神を生かしたままこれを移植しようとした。しかし、日本とアメリカの文化状況が大きく異なるうえに、幼稚園の歴史も大きく異なっていたため、全く異なる二つの翻訳本が同時期に完成したのである。ハウは『母の遊戯及育児歌』を母親や保育者の幼児理解と相互の絆を自覚させるための書として位置づけ、幼児のための「遊戯唱歌集」としては『幼稚園唱歌』と『幼稚園唱歌續編』充てようとしたのではないだろうか。この点では、ブロウが「母親および教師向け」と「幼児向けの遊戯唱歌絵本」の二分冊にしたことと共通している。

しかし、ハウは、母親や保育者向けの『母の遊戯及育児歌』で、フレーベルの精神を損ねないように英訳本から翻訳紹介し、挿絵を日本の風俗・生活に合わせて翻案する一方、幼児のための「遊戯唱歌集」は、フレーベルの『母の遊戯と育児歌』の遊戯歌ではなく、アメリカの幼稚園教育ですでに歌われていた唱歌教材を用いた。日本の他の幼稚園では、文部省の音楽取調掛による唱歌や雅楽課の保育唱歌を音楽として用いていたが、ハウはもともとアメリカの文化背景をもっていたので、アメリカの唱歌を選択したのである。

ブロウの翻訳は、アメリカの幼稚園運動がひとつの山場を越え、フレーベル主義理論の神秘主義や象徴主義が論議され批判されはじめた頃に出された。ブロウはあらためて、フレーベルの幼稚園の精神は何かを問いなおし、学びなおしていた。そして『母の遊戯と育児歌』を二分冊にし、幼稚園の幼児向けには、韻をふんだ子どもの詩（The nursery rhymes）と欧米の子どもの歌曲を豊富に取り入れた「遊戯唱歌集」とし、母親と教師の幼児理解のために挿絵とモットーと説明文の翻訳書を別に出版した。これは、それ以前のジャービスの英訳本やロードの英訳本と違って、フレーベルの精神の核心をおさえて、アメリカの母と子、教師のために大幅に改変し、翻案したものであった。

4．まとめ

フレーベルの主著『人間の教育』と比較して、『母の遊戯と育児歌』に関する研究はあまりなされていない。原書が何年に出版されたのかについてさえ、二説があり[40]、楽譜はどうなっていたのか、フレーベルの死後、どれだけの版を重ねたのかについても明らかではない。本研究の目的は、このようなことを文献について歴史的にあとづけることではない。

幼稚園の教育課程の中心に、「遊戯」があるが、その「遊戯」はもともと、フレーベルの幼稚園の遊戯がとりいれられたものである。それは、日本でもアメリカでも同じであった。大部分の「遊戯」は、歌（歌詞と音楽）と遊戯動作を併せ持っている。このような「遊戯」が、どのように教材化されて、幼稚園で実践されてきたのかが、筆者の最も関心のあるところであり、本研究で明らかにしたいことであった。

まとめにあたって、あらためて、フレーベルの『母の遊戯と育児歌』の教育的意義は何であったのかを問い返し、そのうえで、アメリカと日本における遊戯の「教材化」の問題をまとめておきたい。

まず、第一に、『母の遊戯と育児歌』の読者対象は、母親だったのだろうか、幼児たちだったのだろうか、の疑問が生じてくる。ハウは、これは「母の書」であるから、として母親や保育者のための幼児理解のための書として位置づけている。ブロウも、本書を母親と教師のための幼児理解を助ける書として翻訳紹介し、幼稚園の教材としては大幅に改編した「遊戯唱歌絵本」にした。しかし、当のフレーベルの意図はどうだったのだろうか。フレーベルが創設した幼稚園の究極の目的は「母親の生命と乳幼児の生命の結合（絆）をとりもどすこと」[41]であった。当初の幼稚園には、母親の腕に抱かれた乳児から６，７歳ぐらいの幼児までが通っていて、現代のように年齢別学級編成で一斉に保育が

なされるようなものではなかった。『母の遊戯と育児歌』には、確かに「家庭の書」と扉に書かれているが、フレーベルの頃にあっては、家庭の母親向けの書と幼稚園指導書は画然と区別されていなかったと思われる。実際には、幼稚園で母親も幼稚園教師も一緒になって、赤ん坊に指遊びや手遊びなどをやったのであろう。やがて、幼稚園が世界の各地に量的に普及するなかで、年齢別グループ編成となり、遊戯の教材化も必要になってきた。そして、乳児や母親は幼稚園児と分けられるようになり、幼稚園児のための遊戯唱歌が教材として整備されていった、と考えられる。

第二に、フレーベルの「遊戯唱歌絵本」という独特な創作の意味が問われる必要がある。まず、フレーベルは「遊戯」を幼稚園の教育内容の中心に据えた。「遊戯」には、遊具や作業具による遊びと、もうひとつの重要なものとして身体で表現する運動遊戯や歌を伴う遊戯があった。『母の遊戯と育児歌』に収録された遊戯歌はほとんどが、ドイツの伝承遊びやわらべうたである。それらは、手足、感覚器官、指などを使う遊戯歌、花や小動物などの自然とかかわる遊戯歌、大工、建具屋、農夫の草刈りなどのおとなの労働を模倣する遊戯歌、等々から成っている。このような伝承遊戯やわらべうたは、イギリスのマザー・グースをあげるまでもなく世界の各地に存在しており、幼稚園が導入された当時の日本においても豊富に存在していた。

伝承遊びやわらべうたは、①遊戯動作，②音楽，③歌詞またはストーリーから構成される。フレーベルの『母の遊戯と育児歌』は、①②③と、遊戯をイメージさせる挿絵、さらに一緒に遊ぶ大人へ媒介する説明文やモットーをつけて一冊の本になっていた。このような「遊戯唱歌絵本」は、フレーベルの独創によるものであり、他文化のもとでその深い意味が理解されるには、時間がかかった。

第三に、幼稚園の教材として、この「遊戯唱歌絵本」をとらえた場合、普遍性と文化的差異の両側面から検討できる。ブロウはThe Mottoes and Commentaries のIntroduction でわらべうたや伝承遊戯(The nursery rhymes and the nursery plays)の普遍的な意義をのべ、フレーベルの遊戯における模倣(imitation) の重要性を指摘し[42]、ハリスも遊び(The plays and games) における幼児の自己活動(self-activity) を取り上げている。[43]このように、乳幼児の心性における模倣や自己活動の意味からくる伝承遊びの重要性は普遍的であり、ブロウはそれをおさえていた。幼稚園を欧米から導入し、アメリカのような幼稚園運動を経験しなかった日本では、当初『母の遊戯と育児歌』のこの普遍的で基本的精神を理解できた幼稚園教育関係者がどれだけいたかは疑わしい。また母子の絆や人間と自然の関係も普遍的な問題である。このように基本的なテーマは普遍的であるが、表現された言葉、挿絵、音楽は、それぞれの国の文化によって異なってくる。

アメリカでは、ブロウが、言葉は英語の韻をふんだ詩に、挿絵は原画に修正を加え、音楽はアメリカの子どもに向いた曲を選曲して『母の遊戯と育児歌』を受容した。

日本では、ハウの先駆的な努力で翻訳導入をしたが、全く異なる文化のもとで、言葉、挿絵、音楽を大幅に変容させて受容しなければならなかった。幼稚園の遊戯唱歌教材としては取り入れることに成功しなかったと言ってよい。『母の遊戯と育児歌』が出版されて１５０年を経た現在、日本の幼稚園では、園庭で「はないちもんめ」「あぶくたった」などの日本の伝承遊戯が遊ばれている。アメリカと日本での一冊の「遊戯唱歌絵本」の導入の過程に、幼稚園における「遊戯」のカリキュラム化の本質的な問題が示唆されているといえる。

注)

1）白川蓉子　フレーベルの『母の遊戯と育児歌』の教育的意義とアメリカ、日本での受容の検討――その１　その教育的意義とアメリカでの受容――（神戸大学発達科学部研究紀要第４巻第２号　1997年）

2）田中不二麿　理事功程　明治８年　文部省　文部理事官として岩倉使節団に随行した時の報告書　田中不二麿　米国百年期博覧会　教育報告　巻一～巻四　文部省　明治10年(1877)　この巻二にフレーベル幼稚園や米国法幼稚園について報告している。

3）本論文では、Fourteenth Edition, London, 1883を用いた。

4）ロンゲ夫妻（Bertha Ronge & Johann Ronge)。夫のヨハネス・ロンゲは1848年のドイツ市民革命を擁立した政治家・宗教家であった。後に起こった反革命の迫害をのがれて妻、ベルタとイギリスに亡命。夫妻は1851年ロンドンでフレーベル幼稚園を開設した。1854年からは、英語を用いた幼稚園とし、イギリスに初めてフレーベル幼稚園を導入紹介したことになった。

5）桑田親五『幼稚園』下巻（『明治保育文献集』第一巻日本らいぶらり　昭和52年 ）47-48頁

6）Whichard Lange, Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt. 2, 1862 に Bewegungsspiele の章が設定されている。小原圀芳・荘司雅子監修『フレーベル全集　全五巻』玉川大学出版 1981 年では、第四巻375 ～461 頁に収められている。

7）Elizabeth. P. Peabody & Mrs. Horace Mann, Kindergarten Guide, Schermerhorn, New York, 1869 Edward Wiebe, The Paradise of Childhood, Milton Bradley & Co., Springfield Mass., 1870 の二書のことである。

8）Adolf Douai, ibid. pp. 1-2　　9）Adolf Douai, ibid. p. 9

10）Adolf Douai, ibid. p. 40 'CHILD-LIKE SONGS'と題しているので、「唱歌」と訳した。

11）白川蓉子・五味克久・岩本真智子　「唱歌」の成立とその特質――フレーベルの遊戯唱歌と伊澤＝メイスンの二つの経路から――（神戸大学発達科学部研究紀要第３巻第２号　1996年）

12）関信三『幼稚園創立法』（『明治保育文献集』第二巻日本らいぶらり　昭和52年）359 -362頁

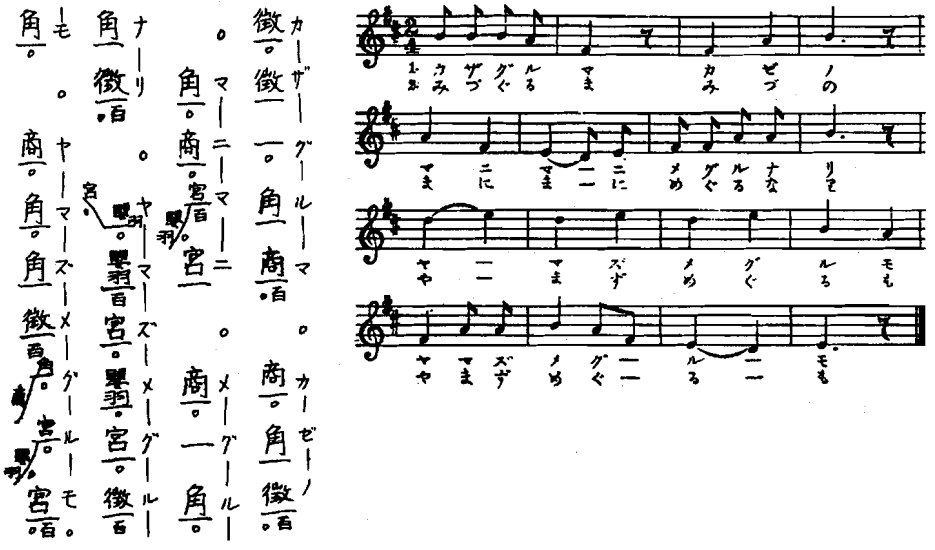
13）平出久雄　「保育唱歌」覚え書（田辺先生還暦記念論文集『東亜音楽論叢』昭和18年)629-633頁

14）小原圀芳・荘司雅子監修『フレーベル全集　五巻』36頁　　15）同左書　37頁

16）小原圀芳・荘司雅子監修『フレーベル全集　四巻』407 頁　　17）同左書　408 頁

18）明治44年の松本市立幼稚園保育事項には「風車」「蝶々」「環」が挙がっている。（ 岩本真智子　明治期唱歌教材にみる異文化導入と定着過程に関する研究 1997 年修士論文 37 頁）

19）「風車」の墨譜と五線譜



20) 左の詩は小原圀芳・荘司雅子監修『フレーベル全集　五巻』の86頁。挿絵は茅野蕭々譯『フレョェベル母の歌と愛撫の歌』岩波書店昭和9年からコピーした。

21) 小原圀芳・荘司雅子監修『フレーベル全集　五巻』246 頁

22) 桑田親五『幼稚園』下巻（『明治保育文献集』第一巻）338-339 頁

23) 白川蓉子・五味克久・岩本真智子　前掲論文

24) 白川蓉子　明治初期における「唱歌」と体操科「遊戯」の特質（教育学研究第42巻第1 号　日本教育学会　昭和50年 ）

25) A.L.ハウの幼児教育論と日本の幼稚園教育への貢献については、頌栄保育短期大学が資料を整理し、研究にあたっている。頌栄の同窓会による頌栄保育学院「頌栄とハウ先生」頌栄六十周年記念誌（昭和24年),キリスト教保育連盟がまとめたANNUAL REPORT OF JAPAN KINDERGARTEN UNION, vol.1-6 ,1985 年　日本らいぶらり等が参考になる。しかし、まだハウに関する研究はこれからであると思われる。高野勝夫「エ・エル・ハウ女史と頌栄の歩み」頌栄短期大学 1973 年が主要文献である。

26) 高野勝夫「エ・エル・ハウ女史と頌栄の歩み」頌栄短期大学 1973 年 40 頁

27) 高野勝夫　同書 33 頁　　28) 高野勝夫　同書 33-36頁

29) エ・エル・ハウ『幼稚園唱歌』明治25年　頌栄 58-59頁　なお、本書には英文の目次が最後の頁についている。それによると「鳩舎」はDove Cote で、ロンゲの書のThe Pigeon Houseと異なりドゥアイの書と同じである。

30) エ・エル・ハウ『幼稚園唱歌』明治25年　頌栄 148-150頁

31) 中村　静・高野勝夫　エ・エル・ハウ女史の日本保育史への貢献——幼児音楽への先駆者開拓者として——（頌栄短期大学研究紀要　第8巻 1976 年 ）

32) 獨逸フレーベル著『母の遊戯及育児歌』頌栄幼稚園出版　第三版の序　3 頁

33) 白川蓉子　前掲論文中の
②-a) Mother's Songs, Games, and Stories; Frobel's "Mutter= und Kose=Lieder" Rendered in English by Frances and Emily Lord, Chicago, Alice B. Stockham & Co., 1891　のこと。
初版が1885年となっている。

34) Friedrich Wichard Lange(1826-84)　教師として教員組合活動や一般ドイツ教員集会等に関与し 、フレーベルと知り合って、フレーベルの幼稚園運動を支え、1862-63 年に3巻からなる『フレーベル教育学全集』を出版した。注）の6）参照。

35) 獨逸フレーベル著『母の遊戯及育児歌』頌栄幼稚園出版　第三版の序　6-7 頁

36) 『母の遊戯及育児歌』上巻（『明治保育文献集』第六巻日本らいぶらり　昭和52年)45頁,65 頁 61 頁

37) 獨逸フレーベル著『母の遊戯及育児歌』頌栄幼稚園出版　第三版の序　2 頁

38) W.T.Harris, Editor's Preface to The Mottoes and Commentaries of Friedrich Froebel's Mother Play　p.8
Susan E. Blow, Introduction, p.24

39) 例えば、前論文中の「足をばたばた」の挿絵は、三つのパートからなっている。第二パートの油搾取機と第三パートの台の上の乳児と母の部分絵を一枚の絵に拡大している。

40) ジャーヴィスの書，ロードの書は『母の遊戯と育児歌』の出版年を1843年としている。

41) フレーベルは、幼稚園の設立を呼びかける趣意書等、いたるところで、このように主張している 。フレーベル著　岩崎次男訳『幼児教育論』明治図書参照

42)43) Susan E. Blow, Introduction to The Mottoes and Commentaries of Friedrich Froebel's Mother Play pp. 25-30,　W.T.Harris, Editor's Preface to ibid., pp.13-14